ヒモから布へ　～結ぶこと・織ることのジェンダー的意味とは何か～

ヒトによる道具製作とジェンダー:

『線具』としてのヒモへの注目から見えること

中谷　文美

共同研究者: 上羽　陽子　　金谷　美和

2018 年度ジェンダーの多層性に関する領域横断的研究２　第１回研究会「ヒモから布へ　～結ぶこと・織ることのジェンダー的意味とは何か～」
日　　時: 2018 年 12 月 15 日(土)13:30～17：00
場　　所: 文法経１号館フィールドリサーチラボ
講演題目: ヒトによる道具製作とジェンダー：『線具』としてのヒモへの注目から見えること
講 演 者: 中谷　文美　岡山大学大学院社会文化科学研究科・文学部教授（文化人類学）
共同研究者: 上羽　陽子　国立民族学博物館
金谷　美和　国立民族学博物館
主　　催: 2018 年度岡山大学文学部プロジェクト研究「ジェンダーの多層性に関する領域横断的研究２」グループ

「パレオアジア文化史学」の枠組み

最初に、本日お話しする内容の枠組みとして、今日来られている上羽陽子さん、金谷美和さんと一緒に関わっている研究プロジェクトの概要をお話しさせてください。

それは、文部科学省科学研究費補助金（科研費）の新学術領域研究（研究領域提案型）として 2016 年にスタートした、「パレオアジア文化史学―アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」（領域代表者　西秋良宏）です。領域全体の目的は、旧石器時代のアジア（略称パレオアジア）においてホモ・サピエンス（新人）がいつ、どのように拡散し定着したかを文化史的観点から解明し、より総合的な人類史を構築することにあります。

「過去の証拠に基づく実証的解析」（項目 A）を行う A01～A03 班と、「現在の証拠に基づく理論的解析」（項目 B）を進める B01～B02 班の 5 班構成となっており、その中で私たちは、文化人類学者が集められている B01 班の所属です。

B01 班の役割というのは、要は異なる人類集団が接触するときにどのように文化的なものが継承され得るのか、あるいは併存していくのかという、そのパターンを解析することです。文化人類学は、基本的には生きた人間の暮らしを対象とする学問ですから、何万年前、何十万年も前に生きていた人たちが何をしたのか、どんなことを考えていたのかということに迫るのは非常に難しいわけです。しかも、私たちがこれまで調査対象としてきたのは、南アジア及び東南アジアにおいて、機を用いた布の製作に携わってきた社会なので、ある意味「複雑すぎる」技術です。このパレオアジア文化史学の文脈でいえば、当然のことながら布も布の製作道具も遺物として残っている可能性がないため、私たちがこのプロジェクトに対してどのような貢献をなしうるのかということをずっと探りながら、試行錯誤をしてきたところです。

物質文化という観点からいえば、いわゆる新人がアフリカから出て拡散していった先で発見されている考古資料の中心的な存在は、もちろん石器です。ほかにも残っているものとしては、装身具の一部、特にビーズです。孔が開いた、あるいは人工的に孔を開けたと考えられる貝などが多くの場所で発掘されています。あとは、海洋資源の利用を跡付けるようなものが残っている場合もあります。

また、たとえば大陸部から海を渡った先の島嶼部に新人の痕跡が残っているということは、当然、航海技術がなければそこに行きつけないだろうとか、そういうことが分かっているわけです。ただ、このプロジェクト全体として重視しているポイントの一つは、原人や旧人と区別され得る、現代人的行動(modern human behavior)とは何な

のか、それはどういう特徴を持つかという点にあるということです。

現代人的行動と道具への注目

これまで指摘されている現代人的行動の特徴には、たとえば装身具を身に付ける、顔料を用いる、ラスコーの洞窟壁画に代表されるような、イメージというものを描いてそれをかたちに遺すというような、象徴行動といわれるものがあります。さらに、新たな生態環境を持つ地域に拡散し、そこでうまく順応していって、定着を果たすといった能力、あるいは石刃や細石器、そして骨角器の製作技術を持つ、石器をつくるために最適の石材を遠隔地から持ってきて、別のところで加工するといったことも挙げられています（門脇 2013）。

ほかには、複雑な道具、つまりいくつかの部品が組み合わされた、複合的な道具（composite tools）の生産、あるいは道具をつくるための道具（二次道具）の使用、そして言語や宗教を持ち、埋葬といった行為を行うことも特徴として認められるのではないかと言われています（篠田 2017:80-81）。

ただ、これまでの研究でいろいろなものがどんどん出てきて、分析が進んでいるのはやはりヨーロッパ地域中心であるため、アジアに目を転じてみるとどうなのか、というのが今回のプロジェクトの焦点となっています。

たとえば、中央アジアにおいては、新人がそこにいたのだということは言えるけれども、高度な骨角器や芸術表現のような、いわゆる新人的な特徴を跡付けるような、創造性を分かりやすく示す資料はまだ見つかっていない（長沼 2013）。

また、東南アジア・オセアニアに関して指摘されてきたのは、不定形な剥片と石核からなるチョッパーとか、チョッピングトゥールと呼ばれている、「単純な」石器製作が長い間にわたって続き、石器に進化の跡がみられないということです。これをどう解釈したらいいのか。

先史考古学においては、当然のことながら、考古遺跡で発掘された石器をどのように分類し、分析し、そこから技術の系統や、進化の系譜を跡付けていくことが重要となります。ただ次に、発掘に至るまで「残った」遺物からどこまでのことがわかるのか、ということに対する問いが出てきているのかなと思います。

言い換えると、石器以外の遺物が少ない地域を対象とする場合はとくに、石器を手掛かりとしながら、そのつくり手がどのようなことを考えていたのかという困難な問いに取り組む必要がある（西秋編　2013：194）。その場合に周辺的な状況、たとえばどんな植生であったかとか、どんな技術がこの地域で生き延びるために必要だったのかというところも含めて考えていくことが重要となるのではないかと思います

特に、東南アジア・オセアニアに関しては、島嶼環境にどのように適応したのかということを考える必要があります。そのときにはたとえば、はるかかなたの見えない島に渡るような海洋技術が具体的にどのようなものであったのか、あるいは、ヒト自身の移動だけでなく、モノの運搬具としてどのようなものがあったのか、といったことを考える必要がある。そこで、船の形状や素材の再現をめざして、実験考古学のようなアプローチも試みられています。

考古学を専門としていない私たちが、この分野に何らかの貢献ができるポイントがあるとすればどこか、ということを考えたときに、私たち 3 人が注目したのは、結束具でした。

何らかの素材、たとえば丸太のようなものを舟（raft）として使おうとした場合、一本の丸太だけでは物が運べないので、丸太と丸太を組み合わせる結束具が必ず必要になったはずです。つまり、「縄」のようなものですが、きちんと適した素材を適したかたちで加工して、つなぎ合わせるための道具を生み出す必要があったということです。

だとすると、道具としての石器自体をいかに精緻なものにしていくかという進化のベクトルとはまた違って、いくつかの道具を組み合わせて何かの目的に使うという、そういう新たな発想というものが必要になってくる。つまり、こういう「メタ道具」を生み出し、自由に操るということが必要になってくるので、おそらくそれがホモ・サピエンス・サピエンスのブレイクスルーなのではないかという指摘もあります（石村 2013：123）。

ただ、この点については、東南アジアにいた原人にあたるエレクトスも、舟は絶対につくっていたのではということで、どこまでホモ・サピエンス固有の特徴を見出せるかという部分は依然として論争の的であると理解しています。

少なくとも、私たちの視点に照らして言うならば、考古遺物としてはまず残らないとわかっているけれども、ヒモ状の結束具に注目してみたいと考えました。

そこで今日のご報告は、成果をお示しするというよりも、こういう背景のもとに私たちが取り組

もうとしている研究の意図をお伝えするものです。今後の研究を進めていくうえでのヒントをぜひいただきたいので、よろしくお願いします。

ヒモにできること

ヒモに何ができるかということなのですが、たとえば、「運ぶ」という動作を考えてみてください。モノを運ぶのに、リヤカーとか、さらにはトラックとか、そういうものがまったくないときに、どうすればいいのか。

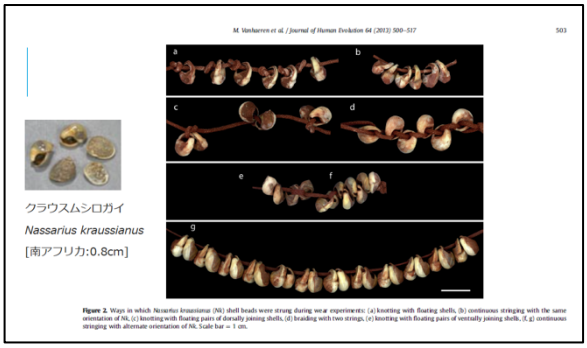
人は結構、頭に載せてモノを運びます。世界各国のさまざまな文化で、頭上運搬というのは非常にポピュラーなやり方なのです。それで、相当重い物を運ぶことができる。ただ、ジャガイモ１個を頭に載せて運ぶというのはあまりに非効率的ですから、何らかの器を利用することになります。たとえば土器に水を入れて運ぶ。あるいは野菜などの収穫物を籠に入れて、また風呂敷のような布で包んで運ぶ。編み袋に赤ん坊を入れて運んだりもします。

また、相当な量の薪をバラバラのままで運ぶことは不可能ですが、ヒモ状のもので何か所か括って束ねれば、まとめて頭上に載せて運べるようになります。

それから、さっき装飾という話が出てきましたけれども、自分の身を飾るもの、それもビーズのようなものをヒモでつなぐことによって可能になります。つなぐのは、私たちが通常思い浮かべるような、石やガラスのビーズだけではなく、動物の爪、ヒトや動物の歯、あるいは鳥の羽根とか、あらゆるものをヒトはつないで身を飾ってきました。

ただ、私たちはつながれているビーズそのものの美しさには目を奪われるけれども、いったい何でつないでいるのかということに対しては、不問に付してきたのではないかと思います。

たとえばある例をご紹介しますと、10 万年から７万年前の遺跡である、南アフリカのブロンボスケイブ（Blombos Cave）というところで孔を開けられたクラウスムシロガイという貝が大量に出土したために、これはつながれて装飾に用いられたのであろうと判断し、具体的にどんなふうにつながれていたのだろうかということを考えた研究者たちがいます。この研究者たちは、孔部分に見られる使用痕、つまりどのようにすり減っているか、どんな方向にすり減っているかということを詳細に分析して、これらの貝がこんなかたちで結ばれていたのではないかと復元を試みているわけです（スライド 1）。



スライド　1

それはそれで、大変興味深い研究成果なのですが、「Thinking strings」（Vanhaeren et al. 2013）というタイトルであるにもかかわらず、つなぐヒモそのものに対する言及は一切ありません。もちろん、見つかっているのは孔の開いた貝だけで、ヒモの素材はわからないわけです。しかし、どんなものだったらこういう結び方ができたのか、太さはどうか、といったことにははなから関心を持っていないように読めてしまう論文でした。

ほかに、ヒモの機能としては「つなぐ」があります。これは、共同研究者の上羽さんの調査地であるインド、グジャラート州のカッチ県でラバーリーという集団が飼っているラクダです（スライド 2）。ラクダたちは、ラクダの毛から作られたヒモで足をつながれています。ちょっとシュールな光景ですね。

スライド 2

またこれは、北海道のアイヌの人たちが、もともと使っていた縄です（スライド 3）。よく知られている熊送り、イヨマンテ（iomante）という儀式のときに、それまで１年ぐらい育てた小熊を儀式の場に引き出すときにつなぐ縄として、特別な意味を込めて綯った縄です。

萱野茂二風谷アイヌ資料館での展示

スライド 3

ヒモでつなぐという行為は、機能的に何かと何かを結び付けるだけではなく、そこにいろいろな社会的・文化的な意味が組み込まれていることがよくあります。伊勢の夫婦岩などもそうですよね。

スライド 4

上の例はインドネシアのティモール島のものですが（スライド 4）、まずパルミラヤシ（*Borassus fiabellifer*）の葉を切り裂いてヒモ状にします。それで輪っかをつくり、そこにパルミラヤシの樹液を煮詰めてつくった砂糖を入れます。つまりこれは、ヤシ砂糖を固めるための器で、このまま市場にもっていって売るわけです。この輪っかの大きさを変えることによって、砂糖の分量も自由自在に変えることができ、1 個いくらとか、10 個いくらとかで売っているというものです。

ヒモをどう呼ぶか

これまでヒモという言葉を使ってきましたが、実際にはさまざまな機能を持ち、さまざまな太さ、強さを持ち、さまざまな素材からできているものがありうるわけで、それをどのように総称できるのか、という問題があります。

比較の観点から考えてみると、まず英語では string という言葉が使いやすいように思えます。しかし、英語にはヒモ状のものを表わす用語として、ほかにも yarn、cord、rope、cable、fiber など、たくさんの選択肢があります。もっと細いものであれば、thread になりますね。

その多様な語彙を日本語に置き換えてみると、だと cord=himo（紐）、yarn・thread=ito（糸）、string=himo（紐）、rope=nawa（縄）、cable=tsuna（綱）、fiber=sen-i（繊維）という感じでしょうか。日本語も相当バリエーションがあることがわかります。

ところが、インドネシアの東ヌサトゥンガラ州に位置するティモール島西部に行きますと、そこで話されているウアブ・メト（Uab Meto）では、英語で言うところのこういう語彙はすべて tani となります。どんな太さの、どんな素材のものも tani です。（ちなみに、私が長らく調査をしてきたバリ島も同じような状況で、長いヒモ状のものはすべて tali と呼ばれます。）

ただ、ちょっとだけ違うバリエーションとしては、バスケットなどを編むときの編み具にあたるようなものに関しては、nono と呼んでいて、それはほとんどヤシの葉でつくるので、意味としては葉っぱという意味の nono なんです。それ以外は、電気ケーブルなども全部 tani です。

このようなことを考えると、私たちがどんな言葉を選んで使うかによって、その言葉が指す対象に関して何らかのイメージを喚起してしまうので、文化比較の枠組みで考えていくためには、工夫が必要になります。そこで私たちはとりあえず、この研究の対象を日本語では片仮名で「ヒモ」、英語では「cordage」という言葉で表すことにしています。

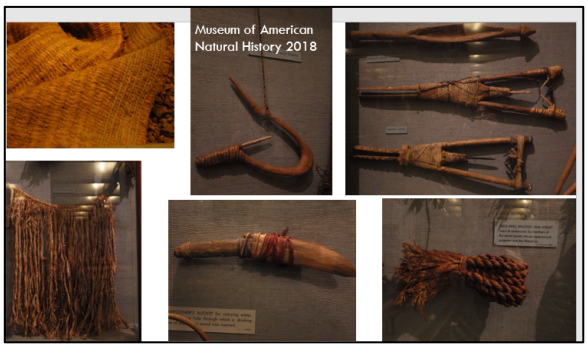
では、そもそもなぜヒモに注目するかということについて、研究背景も含め、改めて順にご説明していきます。

なぜヒモに注目するか
～民族資料にはヒモがあふれている～

文化人類学者が調査をしている多くの地域においても、すでに日用品は工業製品に置き換わっている状況が非常に多いと思いますが、過去の収集品を中心にいわゆる民族資料を展示している博物館などに行きますと、そこにはヒモ的なるものがあふれているといえます。たとえば、北米の北西海岸沿いに暮らす先住民の人たちが使ってきたさまざまな道具を見てみると、非常にシンプ

ルなものから、複雑な加工によるものまで、いろいろな種類のヒモが活用されている様子がわかります。

衣服はもちろんのこと、魚を採るための銛、釣り糸、網などの漁具や、食糧の採取・運搬・保存のみならず、調理にまで使われるさまざまなカゴなど、実に多彩です（スライド 5）。



スライド 5

こちらは、北海道のアイヌの人たちの伝統的な生活用具や儀礼用具を展示した博物館での展示例ですが、全体としてもヒモが非常に目に付く印象があります（スライド 6）。しかも、ヒモの形状のままの展示物も多いです。人がいかに自然資源を利用しながら生きてきたのかということを表わそうとしたときに、自然素材でつくられたヒモが分かりやすい例にあたるからかもしれません。

スライド 6

ほかにも、結婚する娘に母親が託す守りヒモや、サケの皮でできた靴を縛るヒモであったり、ブドウヅルでできている靴や背負い籠、樹皮を糸に加工して織った布から作った着物であったりと、いろいろあります。

復元展示されているアイヌの家の中にも、いろいろな用途がありそうなヒモがたくさん掛けてあるという光景を目にすることができます。

もちろん、北米先住民にしろアイヌの方たちにしろ、これらの生活用具の大半はすでに過去のものとなっているわけですが、少し前までの、伝統的な暮らしをしてきた先住民の人たちの生活用具のなかに、こういうヒモ的なるものが大きな存在感を持ち、重要な役割を果たしていることは間違いありません。

なぜヒモに注目するか
～考古資料にはヒモが見当たらない～

しかしながら、考古学的資料、あるいはそれらの資料を用いた分析ということになると、ヒモというものが一気に見当たらなくなってしまいます。実は先史時代に関する展示、たとえば 2017 年に国立科学博物館で開催された大々的な「世界遺産　ラスコー展」などの際には、衣服はもちろんのこと、ヒモでつないだ装身具を身につけた等身大の人形が展示されていたりもするわけですが、その復元を裏付けるようなモノが残っているわけではない。

きわめて当然な理由としては、有機物であるから、先史時代の考古資料としては残りようがないということがあります。ただし、これに関しては、1990 年代の後半くらいから、次のように考える研究者たちが出てきています。たしかに有機物は残らないのだけれども、本当に一切、何も残っていないのかというと、そうではないかもしれない、もしかしたら石器のどこかに、そうした有機物の痕跡があるかもしれないのに、それを見落としているのではないかというのです。つまり、実際に有機物の痕跡を見いだす技術や訓練が、もしかしたら不足してきたのではないか、そういうものをそもそも探してこなかったのではないかというような指摘です。

植物素材、あるいは動物の皮や腱といった、朽ちやすい有機的な素材からできている道具が考古遺物として見つからない、見つかりにくいというのは紛れもない事実であるし、ならばそういうものを中心に研究したくても不可能だろうということもあるけれども、同時に、先史考古学者の間では、たとえば大型獣の狩猟というものに対する興味があまりにも中心的になったゆえに、結果として、やはりそちらにフォーカスをした研究になってしまっているのではないかという指摘が出てきたということです。

そして、そうした傾向の帰結としては、実際に先史時代の暮らしにおいて非常に大きな比重を占めていたかもしれない要素が、丸ごと調査や分

析から抜け落ちる状況が生まれている、そのこと自体をどう考えるのか。「だって、そんなものは残ってないから」と言ってしまえば、それで終わりですが、なかなか見つからないにしても、そういうものがあったという前提で組み立てる全体像もありえるというような発想を、もう少し持ってもいいのではないのかというようなことだと思います。このような指摘をしている Bruce L. Hardy は、「探しさえもしなければ、見つからない(if we don't look for it, we won't find it)」(Hardy 2013:35)と言い放ったうえで、7万1千年前のフランスの遺跡 Abri du Maras のなかから、撚った繊維の存在を特定しました。

ほかにも、2万6千年前にさかのぼるといわれいてるチェコの遺跡 Dolni Vestonice I 遺跡から粘土に遺されたヒモや布、籠の圧痕が見いだされています（Adovasio et al. 2001)。これはかなり大量に出ているので、ヒモの撚り方や織物・籠の種類など、かなり細かい分析ができています。

それから、1万9300年前とされる、撚られたヒモの断片がイスラエルの Ohalo II と名付けられた遺跡から出ていたり（Nadel et al. 1994)、日本でも、これは有名だと思いますけれども、縄文前期の鳥浜貝塚から大中小の三本組み縄、二本撚りや三本撚りの縄、あるいは素材束などが出てきているということがあります。もちろん、圧倒的に数は少ないわけですが、まったくないということではなくて、少しずつこういう痕跡のようなものが見つかっています。

さらに、先ほどもちょっと言いましたが、孔を開けて加工したビーズがたくさんあったり、針が見つかっているということは、絶対にそれをつないでいたもの、あるいは糸として使っていたものがあるはずですし、骨角器や石器を柄と結びつける何らかの素材が必要だったはずで、石器のほうに何かを巻き付けていた跡みたいなものは残っていたりします。それが一体どのようなものだったのか、という可能性に思いをはせること自体が、あまり熱心には行われてこなかったのではないか。そして、そういう思考やそれを支える技術や訓練の不足を生み出してきた背景には、もしかしたらジェンダー・バイアスというものが働いているのではないだろうかということも言われています。

ジェンダー・バイアスの可能性

ヒモを始め有機素材や籠といったものを積極的に発掘し、分析をしてきた研究者グループはいくつかあるようですが、その代表的存在ともいえるアメリカの男性考古学者 J. M. Adovasio らは、『The Invisible Sex（見えない性)』という共著を出しています。そこで批判的に展開されている論は、要約すると次のようなものです。

そもそも考古学者には男性が多い。その、数多い男性たちが、動物を倒すための武器、狩猟具である石器や骨格器を発掘し、分析し、さらにそれらの石器製作も使用も男性の領域であると仮定してきた。結果として、先史時代の女性の姿や彼女たちが果たしていたはずの役割は不可視化された(Adovasio et al. 2007:24)。

こうした男性中心主義的社会観への批判は、Adovasio らの研究に先立つフェミニスト考古学者によって展開されてきた議論、たとえば、生存のための食糧資源確保としては、女性が中心に担ってきた採集活動が、男性による狩猟を上回る重要性を持っていたことの指摘などとも通底するものです。Adovasio のグループは、カゴ類（basketry）に注目した研究を組織的に展開しているのですが、これまでカゴに光が当たらなかったのは、単に有機物で残りにくいという理由だけでなく、女性の仕事だから無視されてきたのではないかとも言っています。

それはそれで、なるほどと思いますし、ジェンダーの視点に照らせば重要なポイントです。ただ、逆に私が疑問を持ったのは、それこそエビデンスがない中で、私たちの今やっているような分業をそこに当てはめてしまっていいのだろうかということです。何しろ、何万年も前の話ですから。今でもそうですが、個体単位でいえば、体力的に秀でた女性がいなかったはずもないでしょうし、その人たちが、絶対に石器をいじってはいけないというタブーがあったのか、なかったのかというふうに考えると、どこまで男女の役割分担を前提とできるのだろうか、という気がしてきました。

どうせ答えが出ないことなのかもしれないんですが、男性偏重をただすためだったとしても、男女の役割ありきで議論を組み立てることにも落とし穴があるかもしれないと感じています。

道具製作における植物利用の意味

その上で、ヒモ的なるものが残らない最大の理由も、注目をあまり集めてこなかった最大の理由も、植物質のものだったということにあるという事実を改めて考えてみたいと思います。そもそも道具製作における植物利用に光を当てることによって、何が見えてくる可能性があるかというこ

とです。

今回のパレオアジア文化史学の枠組みのなかで言いますと、更新世から完新世初頭の東南アジアを舞台として、人類の熱帯雨林域への技術適応に関する仮説の一つに「タケ仮説(bamboo hypothesis)」と呼ばれているものがあります。

冒頭のほうでちょっと言いましたように、この辺りでは、発掘されている石器の形状というものが、チョッパーとか、チョッピングトゥールと呼ばれているような礫石器であったり、顕著な二次加工が認められないような剥片が多く、長期間にわたって技術的変化が認められない。それが、なぜなのかということなのですが、要はいつまでたってもその文化が進化しなかった、いいかえれば「文化的停滞」がこれらの単純な技術による単純な形状の石器をつくり続けた要因である、どちらが先で、どちらが後かは分からないけれども、結果として、この地域の文化は停滞していたといえる、という解釈が 1940 年代～50 年代には示されていました。

こうした解釈に対する反論として、1960 年代後半以降に複数の研究者によって提示されたのが「タケ仮説」です。この地域においては、そもそも鋭い石器を使う必要はなかったのではないか、たとえば、タケなど、そこに植生としてある植物質が道具資源として利用することができたために、それさえ加工できればよかったのではないか、という観点から出された仮説です。

地域的分布で言いますと、モヴィウス・ラインといわれるものがありまして、これはモヴィウスという人が唱えた境界線です。この境界線の東側から南にかけての地域では、先ほど言ったような不定形な石器群しかいつまでたっても出てこないということが言われていたわけですが、その背後にあるのが、「文化的停滞」と一言で言えるようなものというより、この地域の気候や植生の特徴を踏まえて言えることがあるのではないか、そこに生えている植物資源をどのように人が利用してきたのか、それを使って、何をしようとしようとしてきたのかという問いに応えようとするのが「タケ仮説」であると思います。。

この「タケ仮説」を何らかのかたちで補強するような研究が私たちにできないかということで、少し調査を始めています。

技術の進化とは何か

ここでもう一つ考えておきたいのが、これも思いつき程度に過ぎず、それほど斬新な発想でもないのかもしれませんが、「技術の進化とは何か」「進化と停滞の問題をどう考えるか」という問題です。

さまざまな地域で発掘されたさまざまな時代の石器の系譜をたどっていくと、たしかに形状がより精巧になっていたり、より複雑な技術を駆使して製作したりされてきたように見える。出てきたものだけを系統的に追っていけば、技術の進化・複雑化の過程は見えるし、一部の地域が例外的特徴を見せているということも納得はできます。

しかし、技術というのは、かならず一方向にどんどん進化するものなのでしょうか。そういう疑問を持ったきっかけは、先にも触れた「ラスコー展」で、針が展示されていたことです。これは、アントラー（antler）の骨を加工してつくったものですが、誰が見ても針だと分かるものですね（スライド 7）。

スライド 7

今、私たちが使っている針と比べたときに、現在の針がずっと進化したものになっているかといえばそうではなく、まったく同じだなと思うわけです。むろん、素材は違うわけですけれども、かたちも用途も変わりません。こちらはカナダの先住民のつくった針です（スライド 8）。

スライド 8

つまり、特定の目的を叶えるために必要な技術というのは、その目的をかなり早い段階で達成できたら、それ以上変わる、進化する必要はないものではないか。たしかに、もっともっと、できないことをもっとできるようにといって進んでいく技術の系統もあるけれど、あるところで完成したら、それが何百年前であろうが、何万年前であろうがそこで終わり。あとは、せいぜい素材が変わっていく、そういうこともやっぱりあるのではないかと思います。

ですから、私たちが見ようとしている東南アジアから南アジアにかけての地域においても、平たい言い方をすれば、必要なことはできちゃったんだから、もういいんじゃないの、という理由で同じタイプの石器が残り続けた、という解釈が成り立つのか、あるいは成り立たないのか。前者だった場合、必要なことができている、と考えられる前提に、その地域の植物利用とのかかわりが重要だろうということです。

ただ、もちろん長い間同じ技術水準を保っていたとしても、他の要因の変化により、その後の変化が加速されることはあり得ます。

たとえば、ベドナリクら（Warner, C and R. G.Bednarik 1995）が書いているように、何百万年も同じような物質文化が続いた後に、変化のスピードが加速していくとする。でもさらに、たとえばヒモで何かを結びつける代わりに、ファスナーのような全く異なるタイプの代替物が豊富になれば、ヒモ自体の技術的進化は止まるかもしれない。

日本人では、民俗考古学者の名久井文明さんが、縄文時代の植物資源の利用をめぐって次のように書いています。「人々はそれぞれの自然物に備わった自然科学的特性を利用することで、生きるためにどうしても必要な技術を開発し、受け継いできた…（利用しうる限定的な）範囲内で工夫、改良され、利用経験が蓄積された各技術や「営み」はおそらく縄紋時代のうちに十分なレベルまで到達していたので、その後は踏襲されるだけだった。そのように、ある種の民俗的技術は経時的に不変な自然物の特性を利用し続けてきたから、幾百世代にもわたって大きく変化しないまま受け継がれてきたと考えられる」（名久井 2012:193）。

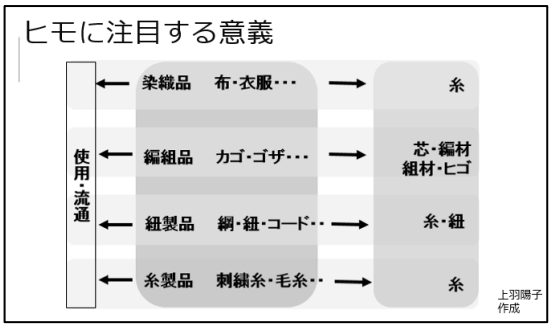
こういう見方は、私は面白いと思うのですが、考古学の皆さんから見てどうなのかということも伺えればと思います。

なぜヒモに注目するか
～繊維・染織研究の視点から～

話があちこちに行きましたが、最後に、もともとの私たちの出発点だった染織研究の視点から、ヒモに注目するということにどういう意味があるのかということを簡単にお話ししておきます。

まず、布というものを研究対象とするときに、やはり私たちは、出来上がった布を「面」としてとらえることになります。でも、当たり前ですがその布を解体していくと、「線」というものに行き着くわけです。ではこの「線」がいかにできてくるか。目に見えるのは、まずは糸ですけれども、この糸は、そもそも繊維から成り立っている。つまり、そのプロセスを逆にたどっていくことで、より素材に近づくという方向があります。

もう一つは、「面」としての布に、さらに手を加え、製品化していく。表面を染めたり刺繍を施したりという、加飾をしていく、そして裁断したり、縫製したりといった加工によって製品化が進んでいくという、もう一つの方向もある。

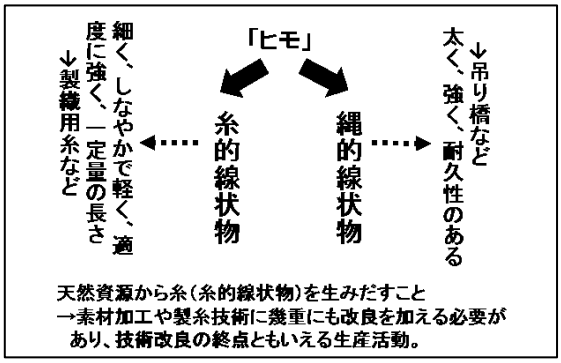


スライド 9

そして、まず解体の方向で考えてみると、布とか衣服にあたるものは糸に行きつく。編組品と呼ばれている、籠とか茣蓙とかですと、私たちの呼び方では糸ではなく、芯とか、編材とか、組材とかヒゴに行きつく（スライド 9）。

このように、さまざまな染織品をいったん分解して、あらためてカテゴライズしてみてはどうか。そういうふうに考えたときに、中心にヒモというものを置くと、そこから、より細くよりしなやかで、だけど適度に強くて一定量の長さが得られるようなものに持っていくという方向性と、もう一つ、ヒモ的なものをさらに撚り合わせたり、綯ったりしてより太く、より強く、より耐久性があるものにしていく方向性とがあることがわかりま

す（スライド 10）。

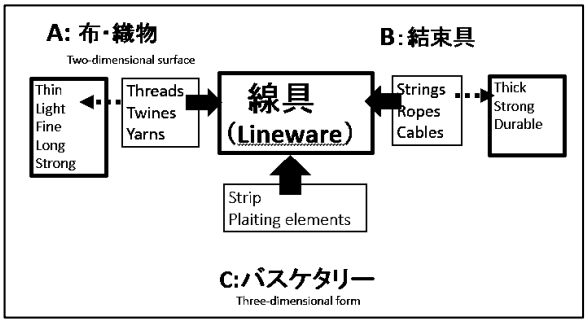


スライド 10

つまり、これまでの発想では、製品つまり出来上がった形をまず見て、布か、籠か、紐かというところから出発し、次に素材の特性や機能、作り出す技法といったものに注目してきたわけですが、こうした種々雑多なものをいったん包括的な枠組みでとらえなおしてみて、これまでの分類のあり方も見直したい。今までであれば、編み物に使う毛糸と、繊細な西陣織にする絹糸と、籠を編むための竹材が同じ土俵で語られることはありえないわけですね。染織品と呼ばれるものと、編組品（バスケタリー）と呼ばれるものも、似て非なるものとして位置づけられてきた。でもその前提をいったん崩したうえで、そのうえで、天然資源、とくに植物資源から、糸状・ヒモ状の線状物を生み出すということがどういう行為なのかということを考えてみたいということです。

「線具」という発想

とはいえ、ヒモを真ん中に置いたままでカゴの話をすることには無理があります。ヒモ状の素材から編み袋は作れますが、私たちが通常思い浮かべるようなカゴは、いわゆるヒモからは作れません。逆にカゴを分解していってヒモになるとはちょっと言い難いので、ヒモという言葉もやめてしまう。ヒモは使わずに、よりニュートラルな概念として「線具（lineware）」というものを設定すると、この３つの異なったタイプの製品が考察の対象として並べられるのではないかと。そうすることで、今まで使ってきた、固定化された分類法をいったん解きほぐして見ることができるのではないかというのが、私たちの今の到着点なのです（スライド 11）。



スライド 11

その上で、線具とは何なのかというと、暫定的定義としては、「特定の用途のために人間の手で加工された線状物」ということを考えています。

ちなみにオズワルト（Wendell H. Oswalt）という人が、食料獲得のために人類が用いてきた道具を手掛かりとする物質文化研究の中で、数値化による比較を可能にするために、技術単位という考え方を示しています。ここで詳しく述べる時間はありませんが、ある人工物を構成する技術単位（technounit）が多ければ多いほど、複雑な構造を持った道具であるといい、特定の民族社会が用いる食料獲得道具（訳書では食料獲得用具）の数とそれを構成する技術単位の数を指標とした、図式的な分析を試みています。この議論で彼が指摘していることの一つとして、多くの先住民社会においては、一つの技術単位か、もしくは 3 つの技術単位から構成される加工物が多く、逆に 2 つの技術単位による加工物の例はきわめて少ないということです。それは、何らかの結束具（これも技術単位となる）なしに複数の部材を接合させることには困難が伴うからです（Oswalt 1976=1983: 40）。こういったアプローチからも、線具というものの重要性を浮かび上がらせることができるのではないかと考えています。

＊本報告書に再録したスライドは、当日使用したものの一部である。

引用文献：

Adovasio, J. M. *et al*. 2001 “Perishable industries from Dolni Vestonice I: New insights into the nature and origin of the Gravettian,” *Archaeology Ethnology and Anthropology of Eurasia* 2(6): 48-65.

Adovasio, J. M., Olga Soffer, and Jake Page 2007 *The invisible sex: Uncovering the true roles of women in prehistory,* N.Y.: Harper-Collins.

Hardy, B. L. *et al.* 2013 “Impossible Neanderthals? Making string, throwing projectiles and catching

small game during Marine Isotope Stage 4 (Abri du Maras, France),” *Quarterly Science Reviews* 82: 23-40.
石村智　2013「東南アジア・オセアニアにおける新人の拡散　人類の海洋への適応の第一歩」西秋良宏編『ホモ・サピエンスと旧人―旧石器考古学からみた交替劇』六一書房。
門脇誠二　2013「アフリカと西アジアの旧石器文化編年からみた現代人的行動の出現パターン」西秋良宏編『ホモ・サピエンスと旧人―旧石器考古学からみた交替劇』六一書房。
Nadel, D. , A. Danin, E. Werker, T Schick, M.E. Kislev and K. Stewart 1994 “19,000-year-old twisted fibers from Ohalo II” *Current Anthropology* 35(4): 451-458.
長沼正樹　2013「中央アジアにおける旧石器編年と旧人・新人交替劇」西秋良宏編『ホモ・サピエンスと旧人―旧石器考古学からみた交替劇』六一書房。
名久井文明　2012『伝承された縄紋技術』吉川弘文館。
Oswalt, W. H. 1976 *An anthropological analysis of food-getting technology*, N.Y.: John Wiley & Sons.
篠田謙一　2017『ホモ・サピエンスの誕生と拡散』洋泉社。
Vanhaeren, M. *et al*. 2013 “Thinking strings: Additional evidence for personal ornament use in the Middle Stone Age at Blombos Cave, South Africa, *Journal of Human Evolution* 64:500-517.
Warner, C and R. G. Bednarik 1995 “Pleistocene knotting”, in J. C. Turner and P. van de Griend eds, *Science of knots*, Singapore et al.: World Scientific, pp.3-18.